

事前評価報告書

事業名: サロンスタジオ整備事業

実行団体: 特定非営利活動法人西部ろうあ仲間サロン会

報告者: 特定非営利活動法人西部ろうあ仲間サロン会

資金分配団体: 特定非営利活動法人ひろしまNPOセンター

実施時期: 2021年11月～2024年1月

対象地域: 鳥取県米子市

直接的対象グループ:

間接的対象グループ:

概要

事業概要
ろう者と聴者が対等なパートナーとして共同でサロンスタジオの運営やコンテンツ作成に取り組むことによって、ろう者が主体的に活躍できる社会参加と経験の場を提供する事業。 ろう者・聴者間の言語的格差（手話は「文字のない独立言語」であり、手話が母語、日本語は外国語という意識に近いことに端を発する諸問題）や経験的格差（長年にわたる「支えられるもの」としての社会経験等に端を発する諸問題）等について、ろう者・聴者間の情報や経験上の格差の認知・是正に取り組む各種活動の促進を行う事業。
中長期アウトカム
地域に居住するろう者が、言語的格差や経験的格差からくる様々な障壁を乗り越え、来るべき高齢障がい者の介護問題や安定的な障がい者就労実現の取組等、地域課題解決における対等なパートナーとして、聴者とともに生き生きと歩むことができる社会を目指すための基盤的機能がハード・ソフト両面で確立している。 これにより、聴者に働きかけ、聴者がろう者とともに活動することに感じるハードルを下げる行政の取組と、ろう者に働きかけ、ろう者が聴者とともに活動することに感じるハードルを下げる本事業の取組が有効に連動し、課題解決のための手法として広く社会に認知され、様々なプレイヤーによる活動が活性化している。
短期アウトカム
ろう者・聴者混成で実施するコンテンツ作成ワークショップが、ろう者の経験的格差を解消するための取組として有効に機能している。 ろう者の言語的格差、経験的格差を解消するためのツールとして、本事業で作成されたコンテンツが有効に機能している。 本活動によって提供されたコンテンツや経験が、地域の様々なプレイヤーによる取組をサポートするための資源として有効活用されている。

事業の背景

(1) 社会課題
ろう者と聴者の間には「取得可能な情報」や「生涯での社会との接点形成における経験の違い」等から、ろう者が自身で判断する際の情報量や社会的経験等について、質的にも量的にも大きな差がある。その結果として発生する諸問題について、聴者の支援意識への働きかけについて認知・取組が進みつつある一方、ろう者に働きかけ、不足する情報や経験を補完する必要性についての認知・取組みが不足している。
(2) 課題に対する行政等による既存の取組み状況
鳥取県は、あいサポーター運動や鳥取県手話言語条例を制定し、障がい者や手話に対する取り組みを全国に先駆けて実施している。 令和3年8月現在でサポーターは57万570人、研修回数8,272回、あいサポート企業・団体は2,211団体となっており、聴覚障がいに限らず、障がいのない方が障がいのある方に「歩み寄り」支援については認知や整備が進みつつあるといえる。 また、米子市においては、平成30年に県内自治体では初となる米子市手話言語条例が制定され、聴覚障がい者関連施策の発展が期待されている。

評価実施体制

内部/外部	評価担当分野	役職等
内部	事業全体評価	理事
	事業全体評価	理事
外部	事業全体評価	米子市加茂公民館館長
	事業全体評価	社会福祉法人こうほうえん法人連携担当者

評価実施概要

評価実施概要

ToCを作成し、評価計画に基づく意見収集及び合意形成のため、評価委員会を11/24、1/13の計2回、動画作成委員会を11/26、同29、12/6、同10日の計4回、当事者（直接的事業対象者）からの意見収集を12/6（18名参加）、同13（16名参加）、同20日（14名参加）の計3回実施した。
 本事業の事業対象・事業設計・アウトカムやアウトプットの設定について、それぞれの参加者に共有し、おおむね賛同を得ることができた。

自己評価の総括

上記のとおり意見収集及び賛同を得たところであるが、一方でろう者の方からの意見収集において、長年のろう者を取り巻く生活環境や制度の不備などを原因として、「自分たちのことを知ってほしい」という観点からの意見が依然として大多数を占めた点について、やはり考慮を要する。
 本事業において、例えばろう者が感じる違和感や不満は、聴者と関わる中で起こる誤解にあるかもしれないことを知ろうとすること等、保護する多数者と保護される少数者の関係ではない、お互いをより理解するために、双方が平行して知ることが重要であることについて、十分に潜在的受益者と共有できたか疑問が残る（一方でこれは、ろう者側にもその必要性が認識されていないのではという本事業の仮定を補完するものとみなすこともできる）。
 まずはろう者の暮らし・歴史・社会的背景を中心に整理し制作したコンテンツを議論の場をつくるきっかけとして、地域住民との意見交換等を通してお互いの誤解を解く活動の実施を計画しているが、今までそのような取り組みを行う機会がなかったために、双方向での理解が進まず、ろう者の抱える課題解決には至らなかったと考えることについて、試行する価値はあると結論した。

評価結果の要約

評価要素	評価項目	考察（妥当性）	考察（まとめ）
課題の分析	①特定された課題の妥当性	概ね高い	<p>【評価小項目】解決しようとする社会課題は、多様な関係者間で共有されているか。事業内容が「多様な関係者」に共有され、事業に対する意見や提案をそれぞれの関係者から聞いているか。</p> <p>評価委員会、動画作成委員会および社会課題を抱える当事者（ろう者）に本事業の説明を実施し概ね賛同を得たため、一定の範囲内ではあるが、聴者・ろう者等多様な関係者間で共有できたと考える。</p>
	②特定された事業対象の妥当性	概ね高い	<p>【評価小項目】事業の対象グループはどのような問題、関心、期待、懸念を持っているか。対象グループからヒアリングした内容が明確に整理されている状態。</p> <p>評価委員会、動画作成委員会および社会課題を抱える当事者（ろう者）に本事業の説明を実施し、対象グループからヒアリングした内容について記録を残した。</p>
事業設計の分析	③事業設計の妥当性	概ね高い	<p>【評価小項目】目標達成・課題解決の道筋はツール（ロジックモデル）を使って整理されているか。ロジックモデルの妥当性について、関係者間で合意できている。</p> <p>評価委員会、動画作成委員会および社会課題を抱える当事者（ろう者）に本事業のロジックモデルを提示し、おおむね賛同を得た。</p>
	④事業計画の妥当性	概ね高い	<p>【評価小項目】アウトカムやアウトプットの達成状況や活動の進捗状況が把握できるように指標を設定しているか。目標値とアウトプットの比較。</p> <p>評価委員会、動画作成委員会および社会課題を抱える当事者（ろう者）に本事業の説明を実施し、目標値とアウトプットの比較について概ね賛同を得た。</p>

事業計画の確認

重要性（評価の5原則）

ろう者、聴者の双方向からのアプローチが重要であるという点について、各関係者間で明確化され共有されている。
また、一方で事前評価で明らかになったようにろう者間で十分な理解を得られていない可能性も考慮し、多様な意見を取り込みながら、同時に過度に押し付けと感じられるようなアプローチにならないように慎重に事業を実施する必要があることについても重要であるという点を確認した。

今後の事業にむけて

事業実施における留意点

新型コロナウイルス感染拡大により、法人自体の事業が停止となっているため、事業実施について、効果的な方法を検討する必要がある。

難聴者との連携、ろう者のアイデンティティに考慮した協調関係の構築が計画可能か

POに以下のとおり意見提出し、合意した。

- ・ろう者と難聴者は双方ともに手話での会話は実施可能であることが多いが、手話会話によって成立している「ろう者のコミュニティ」に所属して生きることを選択するか、それとも健常者社会のなかで生きることを選択するかの違いが両者を分けている（また、「ろう者」のコミュニティは難聴者にとっては閉じたコミュニティに見える可能性もある）。
- ・近年のろう学校等は難聴者よりのスタンスであり、またそれらの教育を体験する機会に恵まれた若年の聴覚障がい者は、「難聴者」として生きていくことを選ぶ傾向にある。
- ・本事業は「ろう者」を難聴者と同様の生き方に誘導するものととらえることも可能であるが、「ろう者」のコミュニティが誕生した社会的・歴史的背景、ろう者の高齢化が進みこれからの生き方の転換が難しいこと等、様々な要素を検討した場合、いかにろう者がろう者としてのアイデンティティを保持したまま、難聴者や健常者との多様な接点を構築するかが重要であるとの合意に達した。
- ・また、上記の方向性で事業実施するにあたり、非常に繊細かつ難解な問題について考慮する必要があることを鑑み、事前段階においては現行計画上での事業実施に注力し、事業経過とともにそこからの発展性について検討することで合意した。

添付資料